

# 正史を訪れる

## Part II 大倭王と倭女王(後漢書と三国志の時代)

### 五章 倭奴国と邪馬臺国(後漢書の時代)

森隆一

下好養牛豕乘船往來貨市韓中  
倭在韓東南大海中依山島爲居凡百餘國  
自武帝滅朝鮮使驛○劉敞曰使驛按當作譯說已見上通於  
漢者三十許國國皆稱王世世傳統其大倭  
王居邪馬臺國按今名邪摩推音之訛也樂浪郡徼去其  
國萬二千里去其西北界拘邪韓國七千餘  
里其地大較在會稽東冶之東與朱崖儋耳  
相近故其法俗多同土宜禾稻麻紵蠶桑知  
織績爲縑布出白珠青玉其山有丹土氣溫  
腴冬夏生菜茹無牛馬虎豹羊鵲鵲或作鷦其兵  
有矛楯木弓竹矢或以骨爲鏃男子皆黥面  
文身以其文左右大小別尊卑之差其男衣  
皆橫幅結束相連女人被髮屈紒衣如單被  
貫頭而著之並丹朱粉身說文曰粉塵也音蒲頓反如中  
國之用粉也有城柵屋室父母兄弟異處唯  
會同男女無別飲食以手而用籩豆俗皆徒  
跣以蹲踞爲恭敬人性嗜酒多壽考至百餘  
歲者甚衆國多女子大人皆有四五妻其餘

(Wikipedia「後漢書」より)

## はじめに

後漢書の卷八十五東夷列伝第七十五倭条を見ていく。倭条以外については、必要な都度簡単な引用に留める。

後漢の成立に関しては、Wikipedia「光武帝」では

光武帝は王莽により造られた新を滅ぼし、25年に漢王朝を復活し、武帝時に匹敵するような再興を成し遂げた。この王朝は後漢と呼ばれ、220年まで続いた。朝鮮では楽浪郡を復興した。この楽浪郡の働きかけに応じて、東夷の諸国が朝貢するようになり、彼らに王侯の位を授けた。

と書かれている。

Wikipedia「後漢書」では

後漢書の成立は5世紀南北朝時代の南朝宋の時代で編者は范曄 398-445である。宋の創始者劉裕に仕えて尚書吏部郎となったが、元嘉9年432事件を起こし、左遷されて宣城太守になり、在任中に後漢書を著したとされている。范曄が執筆したのは本紀と列伝のみである。

と書かれている。後漢の滅びたのは220年であるから、後漢書の編纂から200年ほど前のことになる。現在の日本で見れば、明治元年は1868年であるから、明治からは160年程で、200年前は江戸時代の末期近くの

天保時代を語ることになる。なお、三国志は陳寿により 280 年頃に著された。こちらは魏の滅亡後 15 年程である。

滅亡時と編纂時の差から‘三国志のほうが信頼できる’というのを昔見た。この文だけが記憶に残っているだけで、他は何も記憶にない。おそらく、そんなもんかと感じたが、この文だけは今でも覚えている。ただし、‘信頼できる’は自信がなく、‘信憑性が高い’などの同義語であったかもしれない。これから、三国志の記事を主にし、後漢書の記事は補助的に用いられているように思われる。

考えてみれば、正史の記事に信頼度の差があるのかという疑問が残る。信頼・信用には主観的な部分がある。異なったことが書いてある場合は、対象としている時代が異なっているのだから、何らかの根拠がない限り、そのまま考えるべきではないか、と思う。

後漢の時代は、使者は都へは行かず、楽浪郡で止まったと思われる。したがって、東夷伝を書くには朝貢使の会見記録などの郡からの報告書が用いられたと思われる。楽浪郡は 313 年に高句麗により滅ぼされたため、後漢書の編纂時に楽浪郡の記録が残っていたかどうか疑問であるが、後漢から魏・晋へは禅譲であったため、三国志編纂時には魏の記録が残っていたということは当然考えられる。

## 5.1. 倭の位置

初めに、後漢書に現れる東夷諸国の位置関係について主に高句麗条と韓条から見ていく。まず高句麗条では

“高句麗は遼東郡の東千里に在り、南は朝鮮と濊貊、東は沃沮、北は夫余と接する。” 高句麗 在遼東之東千里 南與朝鮮 濊貊 東與沃沮 北與伏餘接と書かれている。

ここでは高句麗と朝鮮は別に扱われている。これは序で武帝について述べたことに反する。武帝の衛氏朝鮮討伐後、東夷の状況がわかってきて朝鮮のイメージが変わってきたことによる考える。地理的状況からは、ここでの朝鮮は楽浪郡ことと考える。

ここに現れる、濊貊・沃沮・夫余などの位置は4.7節で取り挙げた。Wikipedia「沃沮」では‘高句麗の蓋馬大山(長白山脈)’との記述がある。

漢の成立はBC206年である。このうち、BC8年から25年は新王朝で、それ以前は前漢、以後は後漢と呼ばれている。

漢書では、東夷伝は無く、卷九十五 西南夷兩粵朝鮮傳 第六十五で、西南夷・南粵・閩粵 東甌・朝鮮の順に書かれている。ちなみに、卷九十四上・下が匈奴傳、卷九十六上・下が西域傳となっていて、外夷が書か

れているのはこの3巻である。北あるいは東から書き始めるということかもしれないが、外夷に対する関心度も影響していないだろうか。

朝鮮条は7代世宗武帝(諡号は孝武皇帝)の衛氏朝鮮(衛滿)の討伐のみが書かれている。

元朔元年(BC128)に東夷蕤君南閭らが投降してきた記事からは、東夷には蕤君と梟程度の勢力がいたことになる。今の段階では、この蕤君と後漢書の濊貊との関係はわからない。衛氏朝鮮は既に知られていて、関係は書かれていないので、遼東の東、朝鮮の北、すなわち、後の高句麗の地かその東と考える。

南閭らに対する聴聞から、朝鮮の地にはさらに多くの勢力がいることが予想できる。蒼海郡は設立されたが、すぐに廃棄された後、樂浪・臨屯・玄菟・真番郡の四郡が設置された。この後、臨屯・真番の2郡は廃棄され、玄菟郡は主として高句麗対策、高句麗以南の諸国は樂浪郡が担当するように変化していくが、これに関しては後で考えることにする。前漢末から後漢初期にかけて後漢書に記されていることがわかってきたのではないか。

これらより、本皆朝鮮之地の‘本’は武帝の時代辺りをさすと考える。さらに、武帝の時代では遼東郡以東は朝鮮と呼ばれていたと考え

る。この後、濊は高句麗に追われて東に移動し、後漢書の状況になったと考えている。

葦と濊は同じであろうか。同じならば、上記朝鮮にいた人々が葦・濊とよばれていたことも考えられる。参考までに、「ピンイン変換」は

ピンイン 葦: huī、濊: wèi、倭: wō、委: wěi

である。%% 葦はどこで現れたか

後漢書韓条の冒頭は、プロローグで述べたが、ここで再掲する。

“韓には三種がある。1つめは馬韓、2つ目は辰韓、3つ目は弁辰である。馬韓は西に在り五十四国からなり、北は樂浪郡と南は倭と接する。辰韓は東にあって、十二国からなり、北は濊貊と接する。弁辰は辰韓の南にあり、また十二国で、南はまた倭と接する。”

韓有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁辰 馬韓在西 有五十四國 其北與樂浪 南與倭接 辰韓在東 十有二國 其北與濊貊接 弁辰在辰韓之南 亦有二國 其南亦與倭接

東夷諸国の距離については内郡と思われる遼東郡または樂浪郡のどちらかを基準としている。例えば、“高句麗は遼東郡の東千里にある”と使われている。遼東郡の郡衙から高句麗の都までが千里ということであろう。高句麗の北に扶餘、東に沃沮があり、南で朝鮮・濊貊と接してい

る。この朝鮮は楽浪郡のことであろう。この南に馬韓と辰韓が東西に並び辰韓の南が弁辰・倭である。

ここで図 4.7 を再掲しておく。

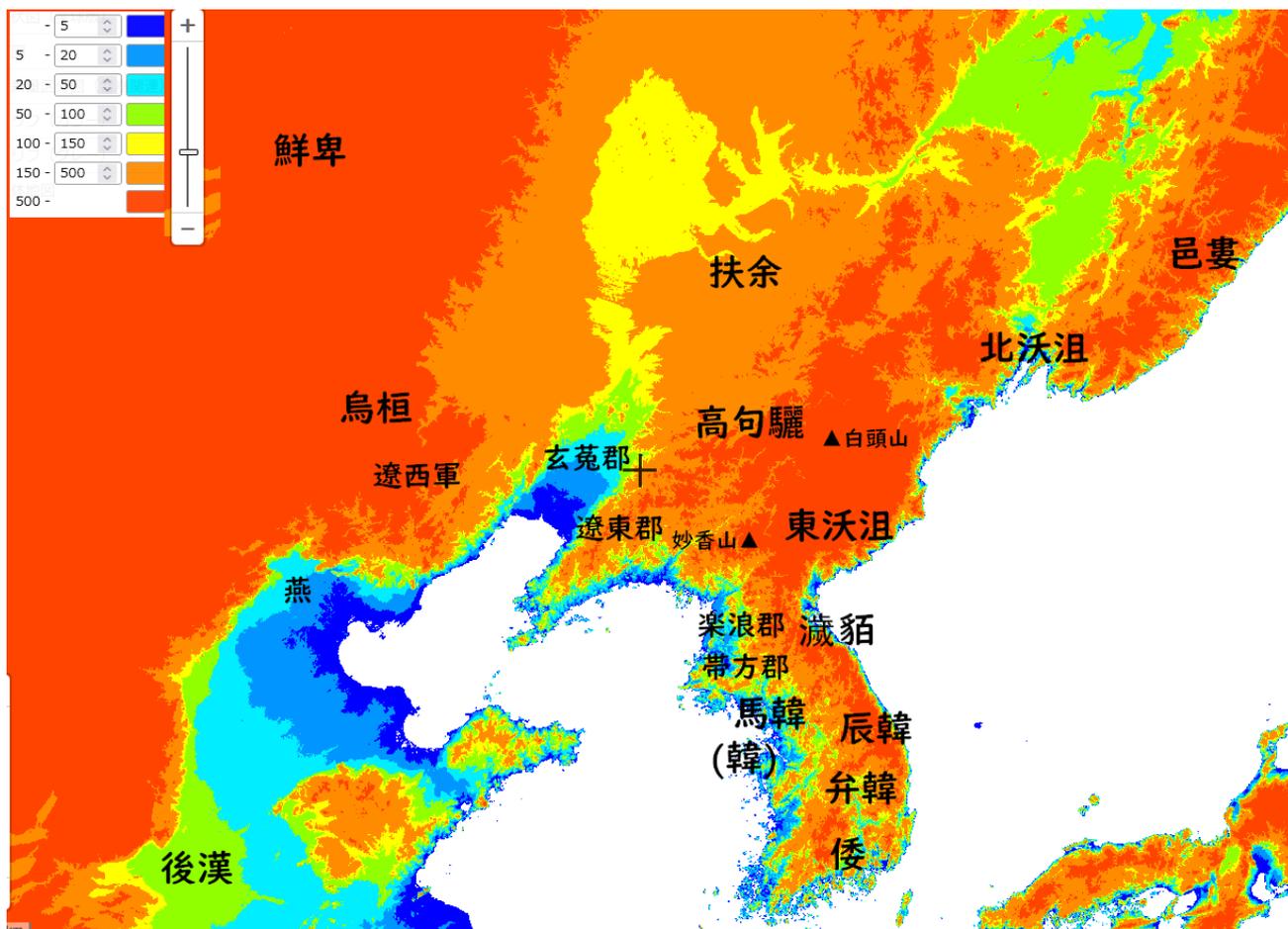


図 4.7 2世紀の東夷

## 5.2. 後漢書倭条の記事

後漢書東夷列傳倭条は

“倭は韓の東南の大海中にあり、山や島に国や村があり、百余りの国が  
に分かれている。” **倭在韓東南大海中 依山島爲國邑 凡百余国**

で始まる。この記事と韓条の **其南亦與倭接** とは両立しないことは序で  
述べた。これに

“武帝が朝鮮を滅ぼしたときより、30カ国程が漢に使いをよこした。各  
国は王を称し、代々引き継いでいる。その大倭王は邪馬台国にいる。”

**自武帝滅朝鮮 使驛通于漢者三十許國 國皆稱王 世世傳統 其大倭王居邪馬臺國**  
が続いている。

武帝が朝鮮を滅ぼしたときというのは、漢書武帝本記で

“元封二年 BC109 朝鮮王は遼東郡を攻め、遼東都尉を殺した。(朝鮮王  
に)死罪とし朝鮮を撃つことを宣した。”

**朝鮮王攻殺遼東都尉 乃募天下死罪擊朝鮮**

“三年 BC108 朝鮮は王の右渠を斬り投降した。その地に樂浪・臨屯・玄  
菟・真番の郡をおいた。” **朝鮮斬其王右渠降 以其地爲樂浪 臨屯 玄菟 真番郡**  
とある。これは、朝鮮が中国の王朝に知られたときであろう。

紀元前 109 年から後漢の成立したま 25 年までに 30 カ国が日本列島から漢(楽浪郡、平壤)に使驛を通じたということになる。これができたのかは疑問である。

倭に大倭王がいて、その居住地が邪馬台国ということに着目したい。大倭王が正史に現れるのはこのみである。王とか大王とか自称が書かれている。国の規模からいって、授けられるのは倭王と〇〇侯と思われることから、後漢の初期には漢王朝の冊封体制には組み込まれていなかったといえるのではないか。

大王から連想するのはアレキサンダー大王である。Wikipedia「アレクサンドロス 3 世」によれば、

大王の死後アレキサンダー帝国はプトレマイオス朝エジプト、セレウコス朝シリア、アンティゴノス朝マケドニアに分かれた。大王の権威により統合されているが、権威が無くなれば、分裂していく。

蒙古帝国も似ているが複雑な経緯をたどっている。引用は長くなりそうなので後で行う。

この‘其大倭王居邪馬臺國’が、正史での邪馬台国の初出であり、後漢書で邪馬台国が現れるのはこのみである。三国志では‘南至邪馬壹国 女

王之所都’ と書かれていて、正史で邪馬台(壹)国が現れるのもこの2カ所である。共に倭王の居る所を指しているのもので、一般的な邪馬台国を用いることにする。邪馬台国の所在については、朝鮮半島から近畿地方にかけて、色々な説が提唱されている。上記地方で大規模な古代遺跡が発掘された場合、邪馬台国と結び付けた報道がなされている。また、北九州と中国四国地方の瀬戸内海沿岸地帯にはかなりの邪馬台国の自称地がある。情熱をもって、邪馬台国があったという根拠を探し求める人々がいて、その幾つかはかなりの賛同する人がいるということに近いかもしれない。これだけ色々唱えられているということは、唱えられている邪馬台国の所在地のかなりのものは正しいのではないかと考えられるのではないか。ということで、次の作業仮説を設ける。

**作業仮説 5.1** (大)倭王の居住する所が邪馬台国である。

この作業仮説の検証を念頭に置いて、考察を進めていくことにする。イメージとして、神武東征の雛型となることが行われたと考えている。作業仮説 5.1. と合わせれば、王が宮を建てた所が邪台国となる。王の移住を伴うものであるから、東征よりも東遷を用いていきたい。

後漢書の記事は

“樂浪郡と邪馬台国とは1万3000里ほど離れており、西北界の拘邪韓国とは7000里ほど離れている。そこには大きな鮫がいる。會稽東冶之東にあり、硃崖と儋耳に近く、法俗は似ているところが多い。”

樂浪郡徼 去其國萬二韃里 去其西北界拘邪韓國七韃餘里 其地大較在會稽東冶之東 與硃崖 儋耳相近 故其法俗多同

が続いて書かれている。會稽東冶之東 というのも正史によく現れる。中国王朝の人の倭のイメージであったのであろう。東冶については納得のいく情報は得られなかった。

會稽については、Wikipedia「会稽郡」では

会稽郡は、中国にかつて存在した郡。秦代から唐代にかけて設置された。郡名は会稽山による。史記によれば夏少康の庶子である無余が会稽に封じられ越の始祖になったと伝えられる。春秋時代には越の国都として発展していた。当時、呉と越がこの地域において対立していたが、越王勾踐は呉王夫差に敗れて会稽山に逃げ込み、夫差の下僕になるという屈辱的な条件によって和睦し、助命された話が伝わっている。後に勾踐は夫差を討って呉を滅ぼすのであるが、この話から、敗戦の恥辱や他人から受けた堪え難いほどの辱めを意味する会稽の恥という故事成語が生まれている。

と書かれている。魏にとっては呉を滅ぼした越に近いということは何らかの期待をいだかせるのであろうか。Wikipedia「タン耳郡」からは、BC110年に、“海南島に珠厓郡と儋耳郡が置かれた”ということである。

魏における倭のイメージは、位置的には会稽の東で、風俗的には海南島に近いということである。会稽は呉を滅ぼした越王勾践の都であることから呉と戦っている魏にとっては期待を込めた関心があったはずである。

會稽東冶之東までは三国志の記事のダイジェストと思われる。この後倭の風俗が書かれたあと、3つの記年記事が書かれている。初めの記事は

“建武中元二年 57 に倭奴国が朝貢してきた。使いは大夫と言ひ、倭国の最南端であると言っている。光武帝は印綬を与えた。”

建武中元二年 倭奴国奉貢朝賀 使人自称大夫 倭国之極南界也 光武賜以印綬

である。倭奴国は上記 30 国の 1 つであろう。使者は大夫と言っていた。大夫は三国志の一大率や百濟の達率を連想させる。倭国の極南界ということからは、倭国と倭奴国が日本列島にあるとするのは、地形的に、不自然で、朝鮮半島にあったとするのが自然と考える。一方、光武帝が与

えた印綬は志賀島で発見されて、国宝に指定され福岡市博物館に収蔵されている金印であるというのが定説である。

次の記事は

“安帝の永初元年 107 に倭国王の帥升らは生口百六十人を獻じ、請見を願った。”  
安帝永初元年倭國王帥升等獻生口百六十人 願請見である。

ぴんいん 帥升: shuài shēng

107 年の倭国の王は帥升といった。ここでは大倭王ではなく王となっている。これは王に任ぜられることにより、永初元年には倭は中国王朝の冊封体制にはいったことになる。最後の願請見であるが、合う相手は請見とあるから、安帝であろう。この年は安帝の即位年であり、即位の祝賀を意図していたのかもしれない。

“桓帝と靈帝の時代に、倭国に大乱がおき、互いに争った。この間は王がいなかった。卑彌呼という女性は、歳が長けても嫁がず神に仕え、民衆に人気があった。これにより、卑彌呼を王に共立した。”

桓靈間 倭國大亂 更相攻伐 歷年無主 有一女子各曰卑彌呼 年長不嫁 事鬼神道 能以妖惑衆 于是共立為王

“1人の男子が食事を給仕し、語ったことを伝えている。宮室に居住している。”

唯有男子一人給飲食，傳辭語。居處宮室

三国志には卑弥呼に関する記事が幾つかあるが、その内、後漢書に書かれているものはこの記事のみである。桓帝の在位期間は147年から167年までで、靈帝の在位期間は168年から189年までである。したがって、桓靈間は147年から189年の間の53年である。この間に大乱がおき、その間は王が無かった。卑彌呼が共立された、すなわち、大乱の終わったのは何時であろうか。桓靈間がどこまでかかるかで変わってくる。全体にかかるとすれば、即位は靈帝の時代で、上限は167年、下限は189年頃となる。一方桓靈間は倭国大亂にのみかかるとすれば、即位は靈帝の後ということになり、上限は190年で、确实な下限は後漢の滅亡の220年となる。

“女王国の東に海を渡り1,000里のところに拘奴国がある。皆倭人であるが女王には属していない。”

自女王国東度海千余里 至拘奴国 雖皆倭種 而不属女王

地理的な理解が困難な記事である。たとえば、拘奴国と倭奴国は関係あるのかないのかなど。滅猫も気になる。

## 東夷伝の最後は

“会稽の海のかなたに東鯤人がいて、二十国余りに分かれている。また、夷洲と澶洲がある。次の言い伝えがある。秦の始皇は方士の徐福将童男女数千人入海 求蓬莱神仙不得 徐福畏誅不敢還 遂止此洲 世世相承 有数万家 人民時至会稽市 会稽東治縣人有入海行遭風 流移至澶洲者 所在絶遠 不可往来” %%

会稽海外有東鯤人 分為二十余国 又有夷洲及澶洲 傳言秦始皇遣方士徐福将童男女数千人入海 求蓬莱神仙不得 徐福畏誅不敢還 遂止此洲 世世相承 有数万家 人民時至会稽市 会稽東治縣人有入海行遭風 流移至澶洲者 所在絶遠 不可往来

で終わっている。会稽に関連することから、倭条に続けて書かれたのではないか。ここでは倭国との関係が記されていないので、倭条に含まれるとは言えないと考える。

### 5.3. 倭と倭奴国

倭奴国に関しては、印面に 漢委奴国王 がかれた金印が有名である。この金印が保管されている福岡市博物館のホーム・ページ「[金印](#)」では志賀島の金印は、江戸時代、博多湾に浮かぶ志賀島で農作業中に偶然発見されました。その後、筑前藩主である黒田家に代々伝わり、1978年に福岡市に寄贈されました。

と書かれている。

Wikipedia「志賀島」には

砂州により本土と陸続きになった陸繋島。全国的にも非常に珍しい。規模は小さいが半島の定義を満たしている。

とある。今では半島となっている糸島も、古くは島であったという。3世紀ごろは、神武天皇紀に現れる吉備の高島や、島ではないが、難波野崎を連想させる。

福岡辺りが三国志の女王国のうちの奴国であるとの根拠にこの金印がなっているが、本当だろうかという懸念は残る。

ぴんいん 歳: huì、濊: wèi、倭: wō、委: wěi からは、

委 wěi は 倭 wō より 濊 wèi に近い。これは4つが同じとすれば解消する。

漢委奴国王 の読みは、‘漢の倭国の奴国の王’ とするのが定説のようである。他の例から、倭王には王が与えられるのは問題ないが、その下の奴国の王は侯以下が与えられると思われる。また、後漢書では、印綬を与えたとあり、金印とは指定していない。三国志では、親魏倭王の卑弥呼に金印紫綬を与え、難升米を率善中郎將，牛利を率善校尉とし、銀印青綬を与えたと書かれている。これからは、漢の倭国の奴国の王に与えられるのは銀印青綬と考えるのではないか。倭国王の朝貢は安帝永初元年 107 であり、建武中元二年 57 年では、委奴国に金印が与えられた可能性はこのころ。この場合は奴国の王が大倭王となるのではないか。

金印が委奴国王の住居としてふさわしい遺跡から出土したならば上の説は殆ど史実とすることができるとは、出土状況は残念ながらそうではない。倭奴(委奴)の位置が福岡市辺りにとすれば、これは倭の最南端とは到底言えない。

中国の王朝から下賜された印綬は権威を保つ有力なものであり、通常はその国の王居で厳重に保管されるか、王自身が所持するものと考えられる。とすれば、志賀島付近に倭奴国の王居があったか、倭奴国王が志賀

島で遭難や戦死などの不慮の事態が起きた可能性が考えられる。これから次の作業仮説を設定する。

**作業仮説 5.2.** 後漢の時代の初期には、倭奴国は朝鮮半島の最南端にあった。その後、倭奴国王(かその末裔)は志賀島付近において金印を失うことになった。

倭国に関し、気になる記事が5つ見つかった。これらを挙げていく。

初めの3つは、旧唐書倭国条での、

“倭國は古の倭奴國である”

倭國者 古倭奴國也

日本国条の、

“日本国は倭国の別種である。その国が日の上の方にあるために日本という名にした。或いは、倭国の名が雅でないために日本と改めた。さらに、日本は古くは小国であったが、倭国の地を併せたという。その人は入朝で、大げさでまじめでないので疑わしい。”

日本國者 倭國之別種也 以其國在日邊 故以日本爲名 或曰 倭國自惡其名不雅 改爲

日本 或云 日本舊小國 併倭國之地其人入朝者 多自矜大 不以實對 故中國疑焉

と、新唐書の、

“日本は古の倭奴である”

日本 古倭奴也

である。

隋書では日本は現れないので、唐の時代に日本国と名のったことになる。倭国・倭奴国との関係を使者は唐の担当者に納得のいく説明ができなかった、あるいは、人によって答えが違っていたと考える。

残る2つは、後漢書高句麗条と三国志高句麗条で、

“東夷の古老は(高句麗は)夫余の別種という。言語と諸事の多くは夫余と同じであるが、気性や衣服は異なるところがある。本は、涓奴部 絶奴部 順奴部 灌奴部 桂婁部の五族がいた。また、本は涓奴部の王であったが、いささか弱く、今は桂婁部の王に代わっている。”

東夷舊語以爲夫餘別種 言語諸事 多與夫餘同 其性氣衣服有異 本有五族 有涓奴部 絶奴部 順奴部 灌奴部 桂婁部 本涓奴部爲王 稍微弱 今桂婁部代之

という記事である。両者ともほぼ同じ内容で、三国志のものを引用した。これからは、高句麗には五族があり、その中から王が擁立されたということである。

これは2つの意味で興味あることである。1つは、王統は基本的には父子相続であるが、状況によっては、5部族のうちの残りの部族からも可能であることである。もう1つは、五族の名前のうち4つは〇奴であ

るということである。ここに、倭奴(濊奴、委奴)がいて早い時期に南下し、倭奴国を倭の最南端で造ったということが思われる。

Wikipedia「高松塚古墳」では、婦人像の服装は、高句麗古墳の愁撫塚や舞踊塚の壁画の婦人像の服装と相似することが指摘されている

と書かれていることから、まんざら荒唐無稽ではないと思う。

ということで、次の疑問を設定しておく。

**疑問 5.1.** 倭國者 古倭奴國也 とはどのようなことであろうか。

**疑問 5.2.** 高句麗の部の ○奴族名 ○奴 と 倭奴(委奴) とは関係があるのだろうか。

## 5.4. 倭国大乱

後漢書の記事「桓靈間倭国大亂」について考える。桓靈間は147年から189年である。Wikipediaの「桓帝」と「靈帝」から

桓帝から靈帝にまたがるのは党錮の禁159と、これに続く宦官とこれに反発する勢力との抗争であった。また、184年には黄巾の乱が始まった。三国志演義はこの黄巾の乱の討伐から話が始まる。さらに、羌や鮮卑といった異民族の侵攻が活発になった。

とある。これからは、桓帝から靈帝の間は、抗争の時代であった。中国においては、桓靈間は混乱の時代を思わせるものであったかもしれない。羌は西方の民族で東夷との直接の接触はない。

Wikipedia「鮮卑」からは、

匈奴が東湖を滅ぼしたとき、その生き残りで鮮卑山に逃れたものの子孫である。安帝107-125の時代、鮮卑の大人の燕荔陽が入朝した。朝廷は彼に鮮卑王の印綬を授けた。これ以後、鮮卑は、あるときは反抗し、あるときは降伏し、あるときは匈奴や烏丸と争った。順帝の時代、再び長城の内部に侵入した。

桓帝の時代、檀石槐が大人の位に就くと、南は漢の国境地帯で略奪を働き、北では丁令の南下を阻み、東では夫余を撃退させ、西では烏孫に攻撃をかけた。かつての匈奴の版図を手中に収めた。

靈帝の時代になると、彼らは幽州、并州の2州で盛んに略奪を行い、国境地帯の諸郡は、鮮卑から酷い損害を受けない年はなかった。

と書かれている。

檀石槐に撃退させられた夫余がどうなったかは興味あることである。この当時の夫余は、高句麗の北にいた。撃退させられた夫余の可能性は、

一部はそこに留まり鮮卑の支配下にはいる

高句麗に逃げその支配を受ける

高句麗の東に逃げ、さらに、南下する

などが考えられる。

東に逃げた先は蓋馬高原が有力な候補と考えている。

Wikipedia「蓋馬高原」では

蓋馬高原は、朝鮮半島北部にある高原地帯である。現在は朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の両江道、咸鏡南道などに属している。広さは40,000km<sup>2</sup>、標高は1,000mから2,000mほどの間で、朝鮮半島最大の高原であり、朝鮮の屋根とも呼ばれる。

白頭山よりも西側に位置し、北は鴨緑江に向かって傾斜しており、赴戦江、長津江、虚川江など鴨緑江の支流が多数走っている。亜寒帯に多いカラマツなどの針葉

樹林が覆い、冬の寒さは零下 20 度から 30 度に至るほど厳しい。高原西部では焼畑農業を営み麦、アワ、大豆などを栽培する人々がいた。高原の西方には、狼林山脈が南北に伸びる。

日本統治時代の 1920 年代後半には鴨緑江の支流をせき止めて長津湖、赴戦湖という二大ダム湖が建設された。これらの水は日本海側にトンネルで引かれ、日本海側の斜面の 1,000m の落差を利用して発電所が建設され、興南に日窒コンツェルンが建設した化学肥料工場など日本海側の咸鏡南道の工業地帯に電力を供給していた。

とある。最後のダムの部分は、古代史とは関係ないが、初めて聞くことであり、水豊ダムと併せて、戦後北朝鮮の発展の礎となったのではないかなど面白いので、長めに引用した。

蓋馬高原が朝鮮半島北部にあるかは問題で、地図からは、平壤辺りまでは大陸のように見える。とにかく、長白山脈は鉱物資源が豊かな所である。これ以前に匈奴から鉄生産が伝わったと考えられ、鮮卑の強大化には鉄が関係しているかもしれない。とにかく、鉄生産の技術を持った夫余系の民族は、山地に住みついた。冬の寒さは零下 20 度から 30 度に至るほど厳しいことから、さらに夫余は南下したかもしれないことは十分考えられる。蓋馬高原の南は穢が居住していた所である。夫余に押さ

れ穢が南下したか、夫余自信が南下したか、あるいは、両者が起きたと思われる。これが倭国大乱の原因のではないかと考える。

穢は東夷伝では時々顔を出す、よくわからない民族である。ここで、次を設定しておく。

### 作業仮説 5.3. 倭国大乱の原(遠)因は鮮卑である。

倭国大乱の時期については、北史では

“靈帝の光和の間で、倭国は乱れた” . . . 靈帝光和中 其國亂 . . .

としぼって書かれている。光和は 178 年から 184 年までである。韓条では、

“靈帝の時代の終わりに、韓と濊は共に盛んになった。樂浪郡とその県は統制ができなかった。百姓は苦悩し、韓に逃れるものも多かった。”

靈帝末 韓濊並盛 郡縣不能製 百姓苦亂 多流亡入韓者

と書かれている。桓靈の間の倭国大乱が影響していることは確かであろう。倭の乱れに対し、難民を受け入れたのか、一部を併合したかが考えられる。どちらにしても、倭が朝鮮半島に居なければ、考えられないことである。

## 5.5. 共立為王

東夷傳で王の共立が記されているのは、今取り挙げている後漢書倭条の他に、後漢書韓条馬韓項と・三国志夫余条・三国志高句麗条がある。これらを見ていく。

馬韓項では

“馬韓は最大で、その種の人を共立して辰王とした。都は目支国である。”

馬韓最大 共立其種為辰王 都目支國

この辰国はたまに出てくるよくわかっていない国である。

Wikipedia「辰国」では

辰国は史記や漢書の朝鮮伝によれば、衛氏朝鮮の時代に現在の朝鮮半島の南部にあったという国である。しかし、後述のように、これは写本のミスによって生まれた錯誤でそもそも実在しなかったという説もある。記録は少なく、その詳細はほとんどわからない。民族系統は不明であり、群小の国々の総称なのか一国の名なのかもわからない。三国志によると三韓の辰韓の前身にあたる国であると見える。しかし極めて資料に乏しい。

と書かれている。とにかくわからないということである。

夫余は

“尉仇台が死に、簡位居立が立つ。適子はなく、孽子の麻餘がいた。位居が死んだとき、諸加は麻餘を共立した。”

尉仇台死 簡位居立 無適子 有孽子麻餘 位居死 諸加共立麻餘

諸加については、

“官名には六畜を用いている。馬加・牛加・狗加がある。村落はどれかの加に属する。”

以六畜名官 有馬加 牛加 狗加 其邑落皆主屬諸加

三国志のほうが少し詳しい。

“六畜をもって官名とした。それらは、馬加 牛加 猪加 狗加 大使 大使者 使者である。”

皆以六畜名官 有馬加・牛加・猪加・狗加・大使・大使者・使者

「コトバンク」からは、六畜は 馬・牛・羊・犬・豕・鶏 である。

高句麗は

“伯固が死んだ。子は2人で、長子は拔奇、小子は伊夷模といった。拔奇は王としてふさわしくなかったので、国人は伊夷模を共立し、王とした。”

伯固死 有二子 長子拔奇 小子伊夷模 拔奇不肖 國人便共立伊夷模爲王

である。高句麗では、共立ではないが、1.3 節で引用した三国志の記事は王を選ぶ部族の交代が書かれている。既出であるが再掲する。

本有五族 有涓奴部 絶奴部 順奴部 灌奴部 桂婁部 本涓奴部爲王 稍微弱 今桂婁部  
代之

部の交代がどのように行われていたかは書かれていない。後漢書でも東夷相傳以為佚餘別種 で始まる同様の記事がある。共立の方法については書かれていない。

時代は数百年下がるが、Wikipedia「モンゴル帝国」での  
モンゴリアを統一したテムジンは、1206年初春、クリルタイ(大集会)において「あまねきモンゴルのカン(王)」に推戴され、チンギス・カンと称した。モンゴル帝国は、モンゴル高原に君臨するモンゴル皇帝(カアン、大ハーン)を中心に、各地に分封されたチンギス・カンの子孫の王族たちが支配する国(ウルス)が集まって形成された連合国家の構造をなした。

というのも参考になる。このような形態が満州からモンゴルにかけての遊牧民の政治形態であったかもしれない。次を設定する。

**作業仮説 5.4. 倭国は部族連合国家であった。**

構成部族が臣下のようにふるまうか、独立国家のようにふるまうかは王家と部族の力関係によるのではないか。

## おわりに

「正史を彷徨う」第一章の体裁を変えたもので、後漢書の記事を考察している。

**疑問 5.2.** 高句麗の部の ○奴族名 ○奴 と 倭奴(委奴) とは関係があるのだろうか。

を考えてみることにする。

後漢書高句麗条の記事で、“涓奴部 絶奴部 順奴部 灌奴部 桂婁部の五族がいた”という記事を見て、‘ここに倭奴(委奴)部があった’としたらというの思い付きによる。これが成立すれば、‘倭奴国’を‘漢の倭の奴の国’という用例の確認できていない読み方をしないで済むことができる。さらに、高句麗との関連が指摘されている高松塚古墳やキトラ古墳についても何か言えることが考えられる。

高句麗に倭奴(委奴)部があったとすると、後漢書に書かれている‘倭國之極南界’との適合性を示すことが必要である。

前漢と後漢の間に、新 8-23 があり、この新により高句麗は討伐を受け、残った政権と東方に敗走した政権に別れた。この辺りは、前稿・第六章 高句麗の王統 で述べた。ここで、倭奴(部)は海(川)運にあたっていたのでは考えれば、海路で南へ避難することは自然な選択といえる。こ

の状況では、光武帝の呼びかけの情報を得て、楽浪郡に使者を派遣することも自然である。また、これにより高句麗の情報を得ることもできる。

邪馬台国にいる大倭王と 57 年に朝貢した倭奴国と 107 年に朝貢した倭国王の帥升との関係は書かれていない。

ここまでを作業仮説とすることも考えたが。前稿 表 6.1 に書かれている各国の戸数で万を越えているのは、奴國二万余戸、投馬國五万余戸、邪馬壹國七万余戸で、万以下は四千余戸が次に多い。これから、倭奴国は倭の移住と共に移住し、博多湾の沿岸に奴国を造った。ここで、海運に従事した。聖徳太子の頃か白村江敗戦後に東に移動し、全部か一部かは明日香に至った。

ここで、次を設定する。

**作業仮説候補 5.1** 高句麗にいた倭奴部は、新の高句麗侵略に伴い、倭の南端に倭奴を造った。ここで海運に従事していた。聖徳太子の頃か白村江敗戦後に東に移動し、全部か一部かは明日香に至った。

最近本文中に書いた思い付いたことを探す音が難しくなった。老化によるものか文章も増えたことによるものか、おそらく、両者によるもの

であろう。この対策として、思いついたことの幾つかをメモ的に残すために、作業仮説候補を設けることにした。時々聞く‘〇〇委員候補’による。この趣旨から、候補には他との矛盾があっても挙げていくことにする。

また、従来の作業仮説には記年の対応に関するものが少なくない。これらは仮説というよりは、本稿では、事実 (fact) に近い。これらを、基準記事と呼ぶことにする。本稿で基準といえるのは記年の基準と位置の基準であるが、当面は記年に関するものを主とし、位置に関するものも幾つかは拾っていくつもりである。

書式は次を考えている。

作業仮説 章番号.番号 (正史名)

作業仮説候補 章番号.番号 (正史名)

基準記事 章番号.番号 (正史名)

正史名は 漢～新唐、高、百、新、記、紀 など

**中断**

## 付録 後漢書の韓条と倭条

### 韓条

韓有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁辰 馬韓在西，有五十四國 其北與樂浪 南與倭接 辰韓在東 十有二國 其北與濊貊接 弁辰在辰韓之南 亦十有二國 其南亦與倭接 凡七十八國 伯濟是其一國焉 大者萬餘戶 小者數韃儵 各在山海間 地郃/閣方四韃餘哩 東西以海為限 皆古之辰國也 馬韓最大 共立其種為辰王 都目支國 盡王三韓之地 其諸國王先皆是馬韓種人焉 馬韓人知田蠶 作綿佈 齧大慄如梨 有長尾雞/鷄 尾長五呎 邑落雜居 亦無城郭 作土室 形如冢 開戶在上 不知跪拜 無長幼男女之別 不貴金寶錦罽 不知騎乘牛馬 唯重瓔珠 以綴衣為飾 及縣頸垂耳 大率皆魁頭露纒介 佈袍草履 其人壯勇 少年有築室作力者 輒以繩貫脊皮 縋以大木 歡呼為健 常以五月田竟祭鬼神 晝夜酒會 群聚歌舞 舞輒數十人相隨 蹋地為節 十月農功畢 亦復/複如之 諸國邑各以一人主祭天神 號為“天君” 又立嚙/甦/蘇塗 建大木以縣鈴鼓 事鬼神 其南界近倭 亦有文身者 辰韓 耆老自言秦之亡人 避苦役 適韓國 馬韓割東界地與之 其名國為邦 弓為弧 賊為寇 行酒為行觴 相呼為徒 有似秦語 故或名之為秦韓 有城柵 屋室 諸小別/警邑 各有渠帥 大者名臣智 次有儉側 次有樊祗 次有殺奚

次有邑藉 土地肥美 宜五穀 知蠶桑 作縑佈 乘駕牛馬 嫁娶以禮 行者讓路  
國齟鐵 濊 倭 馬韓並/併從市之 凡諸貿易 皆以鐵為貨 俗喜歌舞 飲酒 鼓  
瑟 兒生欲令其頭扁 皆押之以石  
弁辰與辰韓雜居 城郭衣服皆同 語言風俗有異 其人形皆長大 美發/髮 衣  
服潔清 而刑法嚴峻 其國近倭 故頗有文身者  
初 朝鮮王準為衛滿/滿所破 迺將其餘眾/衆數韃人走入海 攻馬韓 破之 自  
立為韓王 準後滅絕 馬韓人復/複自立為辰王 建武二十年 韓人廉斯人嚙/  
甦/蘇馬謨等 詣樂浪貢獻 光武封嚙/甦/蘇馬謨為漢廉斯邑君 使屬樂浪郡  
四時朝謁 靈帝末 韓 濊並/併盛 郡縣不能製 百姓苦亂 多流亡入韓者  
馬韓之西 海島上有州鬻國 其人短小 髡頭 衣韋衣 有上無下 好養牛豕 乘  
船往來 貨市韓中

## 倭条

倭在韓東南大海中 依山島為居 凡百餘國 自武帝滅朝鮮 使驛通于漢者三  
十許國 國皆稱王 世世傳統 其大倭王居邪馬檯/臺/颱國 樂浪郡徼 去其國  
萬二韃涅/裏/裡 去其西北界拘邪韓國七韃餘涅/裏/裡 其地大較在會稽東  
冶之東 與硃崖 儋耳相近 故其法俗多同 土宜禾稻 麻/麻紵 蠶桑 知織績  
為縑佈 齟白珠 青玉 其山有丹土 氣溫暖 蓂夏生菜茹 無牛 馬 虎 豹 羊

鵠 其兵有矛 楯 木弓 竹矢 或以骨為鏃 男子皆黥麵文身 以其文左右大小別/警尊卑之差 其男衣皆橫幅 結束相連 女人被發/髮屈纒介 衣如單被貫頭而著之；並/併以丹硃塗身 如中國之用粉也 有城柵屋室 父母兄弟異處 唯會同男女無別/警 飲食以手 而用籩豆 俗皆徒跣 以蹲踞為恭敬 人性嗜酒 多壽攷 至百餘歲者甚眾/衆 國多女子 大人皆有四五妻 其餘或兩或三 女人不淫不妒 又俗不盜竊 少爭訟 犯法者沒其妻子 重者滅其門族 其死停喪十餘日 傢人哭泣 不進酒食 而等類就歌舞為樂 灼骨以蔔 用決吉凶 行來度海 令一人不櫛沐 不食肉 不近婦人 名曰“持衰” 若在塗吉利 則僱以財物；如病疾遭害 以為持衰不謹 便共殺之

建武中元二年 倭奴國奉貢朝賀 使人自稱大倭 倭國之極南界也 光武賜以印綬 安帝永初元年 倭國王帥升等獻生口百六十人 願請見

桓 靈間 倭國大亂 更相攻伐 曆/歷年無主 有一女子各曰卑彌/彌呼 年長不嫁 事鬼神道 能以妖惑眾/衆 于是共立為王 侍婢韃人 少有見者 唯有男子一人給飲食 傳辭語 居處宮室 樓觀城柵 皆持兵守衛 法俗嚴峻

自女王国东度海千余里 至拘奴国 虽皆倭种 而不属女王 自女王国南四千余里 至硃儒国 人长三四尺 自硃儒东南行船一年 至裸国 黑齿国 使驿所传 极于此矣

会稽海外有东鯤人 分为二十余国 又有夷洲及澶洲 传言秦始皇遣方士徐福将童男女数千人入海 求蓬莱神仙不得 徐福畏诛不敢还 遂止此洲 世世相

承 有数万家 人民时至会稽市 会稽东治县人 有入海行遭风 流移至澶洲者  
所在绝远 不可往来